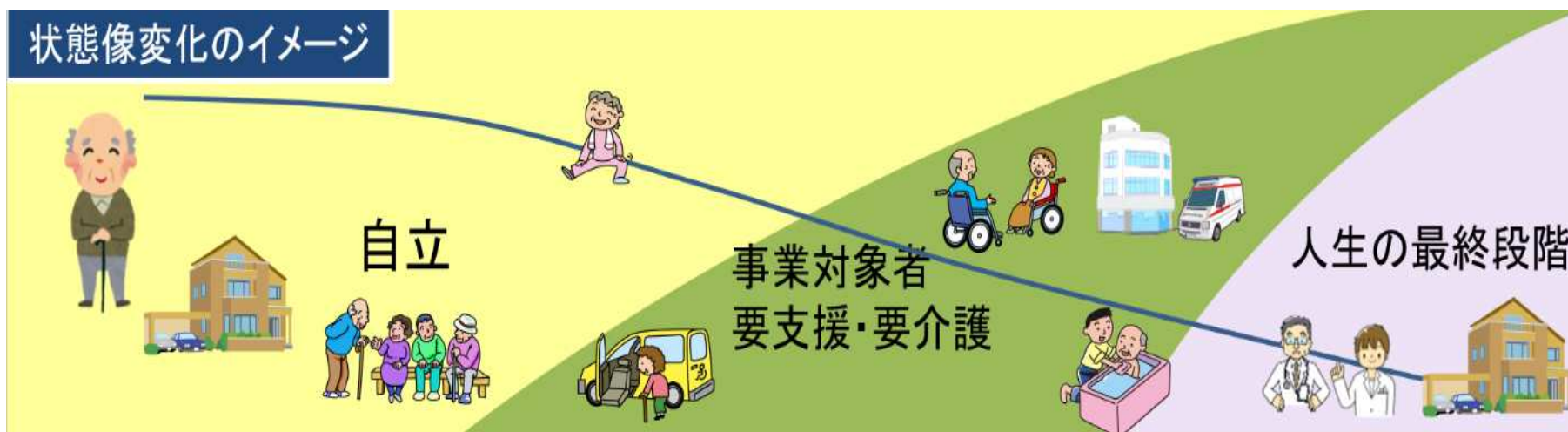


状態像変化のイメージ



出来事のイメージ

在宅療養生活

入院生活

在宅療養生活(施設)

入院生活

本人の希望する場所

体調の変化

急変

入院

退院

急変

入院

退院

看取り

介護のイメージ

医療のイメージ

在宅療養生活において、医療と介護は常に表裏一体であり、入院医療が始まったとしても、退院後の在宅医療・介護へつながることを意識することが重要

- ★在宅⇒入院・退院⇒在宅のスムーズな移行のための連携
- ★入院時から退院後の生活をイメージした情報交換等の連携



日常の療養支援

- ・多職種協働による患者や家族の生活を支える観点からの在宅医療・介護の提供
- ・緩和ケアの提供
- ・家族への支援
- ・認知症ケアパスを活用した支援

入退院支援

- ・入院医療機関と在宅医療・介護に係る機関との協働・情報共有による入退院支援
- ・一体的でスムーズな医療・介護サービスの提供

急変時の対応

- ・在宅療養者の病状の急変時における往診や訪問看護の体制及び入院病床の確認
- ・患者の急変時における救急との情報共有

看取り

- ・住み慣れた自宅や介護施設等、患者が望む場所での看取りの実施
- ・人生の最終段階における意思決定支援

行政



看取りの場面におけるめざすべき姿

人生の最終段階に出現する症状に対する不安や医療・ケア在り方について理解することで、本人が望む場所において、最期まで安心して過ごせるように支援する。

【指標】

【数値目標】

【把握方法】

3つの柱で看取りを推進

「市民の理解醸成」の柱

本人の看取りの意思を関係者で共有できている

【指標】死期直前の世話・治療を話し合った相手
(R5高齢者プランアンケート)

「家族・友人」42.9%・「医療関係者」4.9%・

「話し合ったことがない」54.3%

人生の最終段階について考える

【指標】・死期直前の世話・治療を考えたことの有
無(R5高齢者プランアンケート)

「はい」39.8% 「いいえ」52.7%

・最期を迎えたい場所

<要介護認定者>「自宅」53.8%

「病院」10.4%「施設」9%「考えたことがない」19.1%

<それ以外>「自宅」46.5%「病院」19.1%

「施設」4.9%「考えたことがない」23.2%

・人生会議手帳説明人数:48人

医療と介護の両方を必要とする状態になる前に
「人生会議手帳」を活用する高齢者が増える

【指標】「人生会議手帳」の配布冊数:900冊

「専門職の意識・スキル向上」の柱

在宅で看取りができる

【指標】自宅看取り数:38(R5)

専門職で連携して在宅での看取りを推進する体
制ができている

【指標】ターミナルケア加算:93(R5)

ターミナルケアマネジメント加算:0(R5)

ACPの実践に向けて専門職が人生の最終段階
における意思決定支援について理解を深める

【指標】ACPの実践研修参加者:16人(R5)

専門職が人生の最終段階における意思決定支
援について理解を深める

【指標】基礎的なACPの研修会参加者:431人
(R1～計8回)

体制・環境・連携の柱

施設居住サービスで看取りができる

【指標】看取りの実績がある施設・居住
サービス数:9事業所
看取り介護加算:97(R5)

介護職が安心して看取りに対応できて
いる

【指標】看取り対応介護サービス事業
所:34カ所(R5)

ターミナルケアに必要な体制・医薬品や
医療機器等が提供できる体制が整備さ
れている

【指標】在支診:2 在支病:1(R7～)

訪問診療実回数:119

訪問看護(医療・介護)実回数:2,015人

訪問薬剤管理指導:144(R5)

看取りの場面における取り組みの内容

3つの柱で看取りを推進

「市民の理解醸成」の柱

- ・「人生会議手帳」の作成・見直し
- ・「人生会議手帳」配布、配架
- ・ACP広報（広報こさい、モニター広告）
- ・「人生会議手帳の書き方出前講座」の実施
- ・市民向け講演会でACP啓発

「専門職の意識・スキル向上」の柱

- ・多職種研修会においてACP研修会の実施
 - ・もしバナカード研修
 - ・ACP基礎研修
 - ・実践的なACP研修 等
- ・ACP部会にて定期的な専門職との意見交換
- ・もしバナカードの貸し出し
- ・専門職向けに便りを発行（知識の共有、研修会情報の提供）

体制・環境・連携の柱

- ・在宅医療対応データベース調査の実施、まとめ、公開
- ・連携ツール（シズケア）の推進
 - ・操作説明会
 - ・操作実習
 - ・勉強会
 - ・意見交換会 等

ご意見をいただきたいこと

- ・めざすべき姿について、現状の取り組みによってどこまで成果が達成できているのかを評価するための物差し＝指標を何にするか。
- ・めざすべき姿につながる3本の柱(市民の理解醸成/専門職の意識・スキル向上/体制・環境・連携)を設定し、それぞれに現状を示す指標を図式化した。対応した適切な指標になっているか。
- ・取り組んでいる事業が、めざすべき姿につながる成果を得られる内容になっているか